

東建パブリックニュース

2020年7月15日

経営管理本部 広報IR室

《このニュースは、当社に関連する記事が掲載された新聞・雑誌等の情報を逐次、速報するものです。》

掲載

2020年7月11日 読売新聞 P.23

●当社に関する記事の掲載がありましたので、以下の通りご報告いたします。

interview
Theインタビュー

刀の美と歴史を集める

左右田 稔さん

東建コーポレーション
社長兼会長



1947年、愛知県岡崎市出身。東海大政治経済学部中退。22歳の時に同県刈谷市で起業、水道工事業などを経て、74年に東建コーポレーションの前身「東名商事」を創業した。

7階建て総面積約3350平方メートルの館内に、国内最大規模となる200点以上の日本刀や甲冑が並ぶ。そんな異色の博物館「名古屋刀剣博物館・名古屋刀剣ワールド」を名古屋・栄にオープンさせるのが、賃貸住宅建設・仲介大手の「東建コーポレーション」(名古屋)だ。同社の社長兼会長で、刀剣愛好家でもある左右田稔さん(72)が、40年以上かけて個人的に集めたコレクションを中心に展示する予定。「愛知、岐阜、三重こそ、刀剣文化の中心」と力説する左右田さんが、日本刀への思いを語った。

「聞き手・川井竜太」

◆ 日本刀の魅力はどこにあると考えますか。

◆ 刀には二つの価値がある

一つは、姿や地鉄、刃文の美しさなど、美術品としての価値。手入れさえ続ければ、1000年でも形を変えず、残りません。

もう一つは、「どの時代に誰が所有した」という、歴史背景に思いをはせることができること。様々な歴史ドラマを経た刀が、目の前にあることの神秘性は、日本刀でしか感じられないと思います。

なぜ刀剣に興味を持ち、収集を始めたのですか。

「どの時代に、誰が」の神秘性

徳川家康の出生地でもある愛知県岡崎市や豊田市で生まれ育ち、20歳代前半に地元で起業しました。軌道に乗り始めた30歳手前の頃、「自分への『褒美』として思い浮かんだのが、トヨタの車と日本刀でした。

歴史と縁が深い土地で育ったことで、幼い頃から武将や刀への憧れもあり、今後の人生や経営者としての「守り刀」のような、心のよりどころを持つ思いもありました。

——人生で最初に持った刀のエピソードを。

何の知識もないまま、知人に紹介されて愛知県刈谷市の刀剣商を訪ねました。田んぼが広がる中にぼつんと立つ小屋のような建物で、「本当にこれが刀剣店なのか」と思いながら中へ入ると、本物の刀がずらり。直感で選んだのが、「柳生刀」と呼ばれる地味で素朴な刀でした。しばらくはうれしくて、家の中のほとんどの時間を、この刀の近くで過ごすようになりました。

これまでに集めた約500点のコレクションは、全て会社で設立した一般財団法人「刀剣ワールド財団」に寄贈する予定ですが、この柳生刀だけはずっと手元に置いておくつもりです。

——特に思い入れの深い刀は。

長年探し求めてようやく手に入れた国宝の刀など、それぞれに思いがあります。それが、地元の東海地方の刀にも愛着があります。桑名の村正もその一つ。村正とは本心に不思議な刀で、「名刀」と名高い他の日本刀と比較して、決して美術的価値が高い刀ではないのに、人を引き付ける力がある。実際に持ってみると、村正はなぜか使ってみたく、なるのです。バランスや重量などが、実戦刀として考え抜かれていたからこそだと思えますが、「妖刀」と言われるような作りになっている。村正は持って初めて分かる刀だと思います。

もちろん、日本刀の刀は非常に繊細なので、使ったことはありませんが。※次回は刀剣博物館の見どころなどを聞きます。

東海フフォーカス

以上